

事業名：9 沿岸漁業重要資源調査

課題名：沿岸底魚類・ソデイカ・マアジ・サワラ

期間：H13 年度～

予算額：9,425 千円（単県）

担当：増殖推進室（前田 啓介）

目的：

沿岸漁業の重要対象種の資源動向と漁獲実態を調査し、漁業者へ資源管理方策の提言や効率な漁業経営を促進するための情報発信を行うこと。

成果の要約：

1) 調査内容

(1) ヒラメ、マダイ、ナガレメイタガレイ稚魚発生量

県中部海域（天神川～長尾鼻沖）で稚魚の発生状況を把握するため、4～9月の各月1回、小型底びき網調査を実施した。水深5, 7.5, 10, 15, 20, 30mでは目合40節、水深50, 70, 80, 100, 120mでは目合30節の網を用いて、5mの桁棒により各水深につき、10分間曳網した。試験操業で採集されたヒラメ、マダイ、ナガレメイタガレイの稚魚は、水深別採集数と調査海域周辺の水深別面積から密度を算出し、資源動向の指標値とした。

また、10～3月は、県中部（湯梨浜町～北栄町沖水深約10m）の海域で小型底びき網漁業者の漁網（ビーム10m、目合6節）を曳網することによって実施した。

(2) 漁期前試験操業と漁況予測

県東部の小型底びき網漁が解禁される6月1日の前の5月23日に小型底びき網漁期前試験操業を行った。小型底びき網漁業者所有の目合6節、10mの桁棒を用いて、長尾鼻沖の水深約70, 80, 115mで夜間に各3,000m程度曳網した。

ソデイカ（赤イカ）漁が始まる前には、長尾鼻沖で漁船2隻により漁期前試験操業を8月12日に実施した。134°09'のラインで1隻は岸側で水深135～180m、もう1隻は沖側の水深180～230mでそれぞれ樽流しで35樽ずつ用いて約4時間操業した。また、8月下旬の長尾鼻地先水深185m地点の深度100m地点の水温とソデイカ漁獲量の関係から今漁期の漁獲量の予測を行った。

近年、沿岸の刺網漁業で主力になっているサワラの漁獲量について、京都府と福井県からサゴシ漁獲量の情報の提供を受け、翌年の鳥取県のサワラの漁獲量の予測を行った。

(3) 市場調査

市場調査は賀露地方卸売市場において概ね各月1回実施し、ヒラメは全長、マダイ・サワラは尾又長、ソデイカは胴長の測定を行った。

2) 結果の概要

(1) ヒラメ、マダイ、ナガレメイタガレイ稚魚発生量

2016年のヒラメ稚魚の発生は、6月は良かったものの7, 8月は例年より少ない結果となった（図1）。また、2016年のヒラメ漁獲量は64トンと前年から増加し、2014年から増加傾向が見られた。1995年以降の漁獲量の減少要因とされるネオヘテロボツリウム症（吸血虫症）の2016年の感染率は、9月に増加し始め、例年並みの蔓延状況となった（図2）。

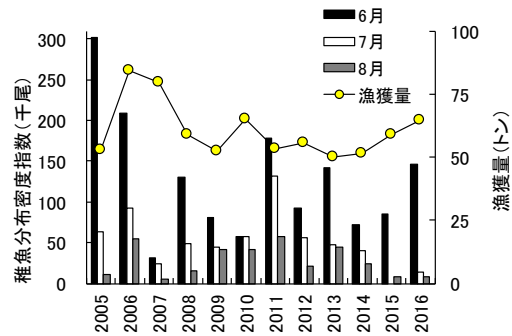


図1 ヒラメ稚魚の発生状況

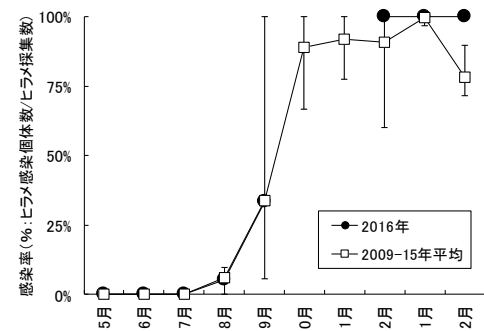


図2 ネオヘテロボツリウム症の感染率

マダイ稚魚の発生は、2013年から比較的好調に推移しており、2016年も2015年以上の発生状況であった（図3）。ただ、漁獲量は減少傾向にあり、2016年の漁獲量は101トンと前年から微減した。

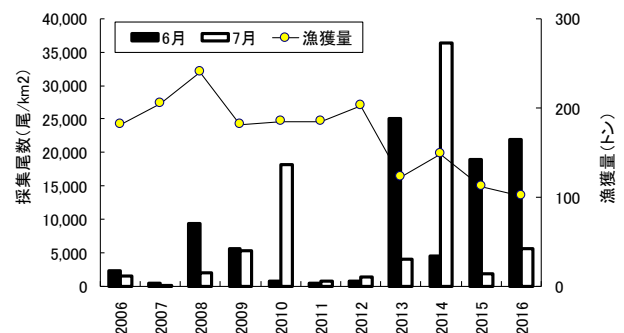


図3 マダイ稚魚の発生状況

2016年のナガレメイタガレイ稚魚の発生は、近年としては比較的良好であった（図4）。ただ、漁獲量



サワラの漁獲の中心となる秋季～冬季の刺網，釣の漁獲物組成を見ると，刺網では，0，1歳魚の漁獲が大半であり，特に2016年は未成魚のサゴシの漁獲割合が多かった（図7）．尾叉長から釣は，1歳中心に0-2歳魚を漁獲していたと考えられ，刺網より平均漁獲サイズも大きかった．

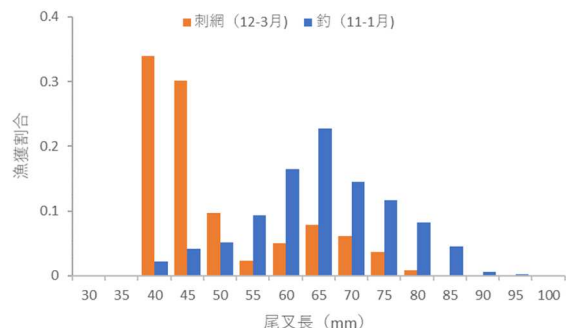


図7 サワラの漁法別漁獲物組成

2016年のソデイカの漁獲量は126トンと前年の5トンから大幅に増加した．8月～10月の漁獲物組成を見ると，8月に同調45cm前後で来遊した群れを成長に合わせて漁獲していることが見受けられた（図8）．漁獲が好調な年は，随時，小型サイズの新たな加入群が見られることが多いが，10月以降新規加入が見られなかったことが特徴的であった．

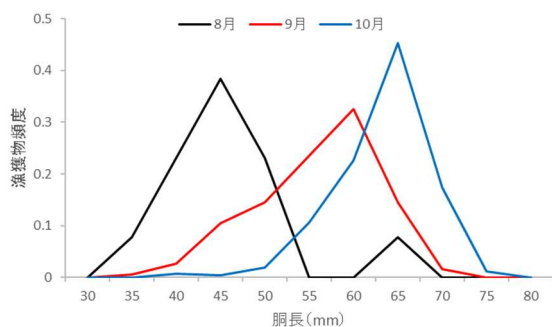


図8 ソデイカの胴長組成

**成果の活用：**

- ・ヒラメ，マダイ，ナガレメイタガレイ稚魚の発行動向やサワラ漁獲量予測結果は，資源管理実践協議会や中部地区漁業振興協議会で報告し，漁業関係者と資源状況等について理解を深めた．
- ・ソデイカに関しては，試験操業の結果等を随時，沿海組合にファクシミリ送信で情報提供した．
- ・市場調査の様子は当センターホームページにも掲載し，広く情報発信を行った．